

「泳いで生き延びよう」と決意した 内間新三さんとその仲間の想いに触れよう！

内間 新三(昭和2年生まれ)

〈防衛隊〉

「泳いで生き延びよう」と決める

私は並里センジさん、内間末七さんと一緒に、艦砲を避けながら岩陰を走って、摩文仁(現 糸満市)の近くにあるウルバマという平坦地まで行った。3 人とも、靴下にいっぱい詰めたお米と飯盒を持っていたので、「(ここにいたら)どうせ最後には追い詰められて殺されるから、夕飯を食べて、泳いで生き延びよう」と決めた。それまでは逃げ隠れするので精一杯だったが、このときには「泳いで助かろう」と決意した。

しかし、ご飯を炊くために必要なマッチがなかった。それで避難民を探し、お米との物々交換でマッチ1個と換えてもらえないか頼むと、避難民は「助かった、助かった」と大喜びしていた。そうしてマッチをもらい、艦砲が落ちたところにできた穴に溜まった水でお米をとき、大きな松林の下で、煙がたたないように枯葉を選んで火を点け、飯盒いっぱいにご飯を炊いた。そして日が暮れるのを待ち、日が暮れると同時に海岸に下りて、岩陰でご飯を食べた。

その後、私たちは夜の7,8時ごろから泳ぎ始めた。センジさんは非常用の海軍の乾パンを持っていた。私は「これ早く食べよう」と言ったが、彼は「島に帰ったら食べるものが無いよ」と言って、乾パンを頭に載せて縛って泳いだ。

私たちが港川(現 八重瀬町)の漁港の方まで泳いできたとき、潮が干上がっていた。それでリーフの上に立ち、今度は漁港の入口の方を泳ごうとしたら、真っ黒な不気味な物体がいくつか見えた。私は与座・仲座の海岸の岩陰にいたときに、アメリカ軍の水陸両用戦車が沖から入って来るのを見ていた〈中略〉

志喜屋の収容所で証明をもらう

末七さんと私は新原の浜に上がり、その晩に久高に戻るつもりで、知念や久手堅の海岸沿いを片っ端からクリ舟がないか探した。しかし全然見つからず、島に渡ることができなかった。それで、志喜屋の向かいにある無人島のアドチ島(現 南城市)まで泳いで渡り、その岩陰の砂を掘って一晩寝た。

夜が明けると、砂浜の周辺にはアメリカ軍の艦船から捨てられたリンゴやオレンジなどがたくさん流れ着いていたので、それを拾って腹いっぱい食べた。その後、末七さんが「潮が引いたら志喜屋に知り合いがいるからそこに行こう。向こうでお芋を食べよう」と言ったので、志喜屋に渡った。

志喜屋集落へ芋を食べに行こうとしたら、知念の浜から銃を肩にかけたアメリカ兵が3

人、こっちに向かって歩いてくるのが見えた。そのため私たちは、志喜屋の海岸のアダン林の中に入り、日が暮れるまで潜り込んでいた。

夕方になると、そこに志喜屋の青年が夕涼みに来た。彼に「こっちにはアメリカ軍がいるのか？」と聞くと、「もうここは収容所になっている。(捕虜であるという)証明をもらわないと自由に出歩けないよ」と言われた。それで証明をもらおうということになった。しかし、私たちは帽子をかぶっていた頭の部分以外は日焼けをしていたので、大変だということになった(軍にいた防衛隊ということがばれると思ったからである)。だが幸い、久高の同級生で母方の親戚でもある福地家の人が捕虜になっていて志喜屋にいた。彼は私立開南中学に通っていたので、私は彼の制服を借りて帽子もかぶり、「学生だった」と言っただけで、ササッと証明をもらうことができた。末七さんは、「遠洋漁業に出て戻ってくると久高島が全島立ち退きになっていて誰もいなかったの、ここに避難していた」と話した。すると、通訳をしていた大久保という日系2世の米兵が「そうか」といって簡単に証明をくれ、「こっちに網がたくさんあるから魚を捕ってこい」と冗談も言っていた。〈中略〉

私たち3人は、「クリ舟があるはずだから今晚、島(久高)に行こう」と話した。それで久手堅の下のアダン林の中で、壊れた小さなクリ舟を見つけた。先の方が割れていたので縄で縛り、水はけのための空き缶も用意して、3人とも後ろの方に乗って漕ぎ出した。割れていた先の部分は水につけないように上げて漕ぎ、ひとまずコマカ島(現 南城市)に到着した。

考えてみよう！

①捕虜になって命が助かったのに、なぜ危険を冒してまで、久高に戻ろうと思ったのか。

②あなたがこの3人のうちの1人なら、どうする？

- ①久高に帰る その理由は？
- ②そのまま残る